

言語文化 目次

この教科書が目指す国語の力

入門 言葉を旅する

言語文化のつながりについて考える

言語文化の現代的な価値を考える

千年の時が与えてくれる安堵

―コラム―花といえば……?

小川洋子

20

1 読書は生きる力

読書の意義について考える

文章に表れたものの見方・考え方を捉える

枕草子 春はあけぼの／ありがたきもの

―コラム―古典はすぐ目の前に

清少納言

22

慣用的な表現を捉える

広がる読書 作家とよむ「枕草子」

酒井順子

30

物語の解釈の多様さを考える

故事二編 虎の威を借る／朝三暮四

―コラム―辞書を引く・辞書を読む

三崎重記

42

それぞれの単元に設定された目標(身につけたい言葉の力)を達成するための教材として、古文・漢文・現代文教材が配置されています。

春を切り抜く〈書く〉

構成や描写を工夫する フォトレポートに表す

坪内稔典ほか

53

2 物語は無限に展開する

構成や展開について考える

物語を構成する要素を捉える

沙石集 児の飴食ひたること

―コラム―「飴」から「砂糖」へ

無住

58

物語の全体構成を捉える

説苑 景公之馬

―コラム―螢の光は誰を照らす

劉向

64

物語の展開を把握する

羅生門

―コラム―羅生門には鬼が棲む

芥川龍之介

72

広がる読書 作家とよむ「今昔物語集」

福永武彦

88

夏を切り抜く〈書く〉

素材のよさや味わいを生かす 短歌・俳句に表す

河野裕子ほか

91



言語文化の
交流について考える

古典作品の文化を学ぶ一環として、狂言師・野村萬齋さんへの**インタビュー記事**を教材として取り上げています。

5 共感海を越える

物語の役割を
考える
言語文化の
価値を捉え直す

待ち伏せ

—コラム— 翻訳された日本文学
—コラム— 広がる読書 翻訳の神様
インタビュー 「人間」を描きたい
—コラム— 言語芸能の世界入門

ティム・オブライエン 訳 村上春樹
村上春樹
話し手 野村萬齋
聞き手 高橋克明

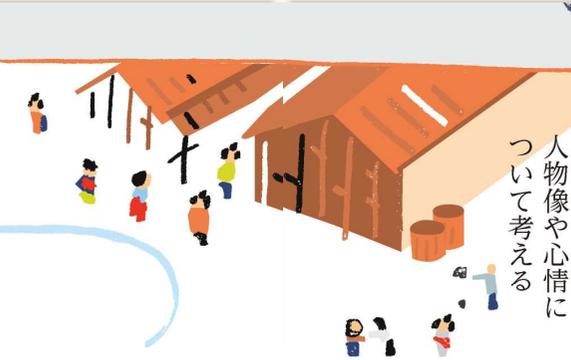
176 184 185 188 196

秋を切り抜く(書く)

詩句や表現技法を吟味する 詩に表す

八木重吉ほか

159



人物像や心情に
ついて考える

4 人の心は万華鏡

人物像を
批評する

平家物語 木曾の最期

—コラム— 平家物語紀行
—コラム— 広がる読書 作家とよむ 「平家物語」

吉村昭

146 154 156

心情表現の
多様さを捉える
言語表現の
多様さを捉える

オムライス

—コラム— 文学は今……
—コラム— 広がる読書 アマガエル

宮下奈都

130 137 138

十八史略 鶏口牛後／先従隗始

—コラム— 三国志を楽しもう

曾先之

140 145



言語文化の継承と
創造について考える

3 言葉は時空を
かけめぐる

物語に表れた
心情表現を考える

伊勢物語 芥川／筒井筒

—コラム— 伊勢物語と源氏物語
—コラム— 広がる読書 作家とよむ 「伊勢物語」 東下り

川上弘美

96 104 106

作品世界を
豊かに想像する

和歌十首 小倉百人一首より
短歌七首 近代・現代の短歌

訳詩 小池昌代

108 112 117

言葉と文化の
関係を捉え直す

野焼

—コラム— 俳句をさかのぼる
—コラム— 広がる読書 豊かな日々を歳時記と

權未知子

118

夏井いつき

124 126

6 文学は主張する

世界に対する認識のあり方について考える

冬を切り抜く〈書く〉

表現効果を高めようとする 随筆に表す

青木玉ほか

身のまわりの物事を批評的に捉える
物語を批評的に捉える
ものの見方・考え方を振り返る

徒然草 神無月のころ／家居のつきづきしく ―コラム― 隠者の系譜 ―コラム― まだあげ初めし前髪の	兼好法師 206
なめとこ山の熊 ―コラム― まだあげ初めし前髪の	蜂飼耳 207
論語八章 ―コラム― まだあげ初めし前髪の	高橋源一郎 207
「方丈記」 作家とよむ 「論語」 作家とよむ	ピーター・J・マクミラン 207
「論語」 作家とよむ	宮沢賢治 210
「論語」 作家とよむ	高橋源一郎 226
「論語」 作家とよむ	高橋源一郎 232

選択総合

言葉を紡ぎ出す

言語文化と自分とのつながりについて考える

自らの課題を決め、解釈、批評、表現を追究する

サーカス コーヒークップ 神様 夢十夜 第一夜 「おくのほそ道」を歩く 月の誤訳 土佐日記 門出 雑説	中原中也 三角みづ紀 川上弘美 夏目漱石 森本哲郎 多和田葉子 紀貫之 韓愈	242 244 246 252 255 258 260 262
--	---	--

「選択総合」單元では、生徒自身が作品とテーマを選び、主体的に課題に取り組むことができます。

古文を読むために

1 歴史的仮名遣い 2 用言・活用・係り結び 3 助動詞・助詞 4 和歌の修辞 5 敬語	18 275 103・278・280 115・282 62・276 153 283
--	---

漢文を読むために

1 訓読の基本 2 漢詩の形式	70・288 172 290
--------------------	-------------------

資料編 ・さまざまな場面で活用しよう

◎ 物語を読むためのキーワード 1 人物設定 2 舞台設定 3 心情表現 4 構成 5 転換点 6 語り手 7 時代・背景	266
◎ 基本古語辞典 ◎ 漢文のきまり ◎ 訓読のまとめ ◎ この教科書に出ってくる漢文の基本句形	284
◎ 日本の言語文化史 ◎ 古文のきまり ◎ 歴史的仮名遣い ◎ 用言活用表(文語・口語) ◎ 文語助動詞活用表 ◎ 文語助詞一覧 ◎ 和歌の修辞 ◎ 敬語	270 275 276 278 280 282 283
◎ 高校で学ぶ音訓と用例 ◎ 言語文化参考図録 ◎ 古時刻・古方位・月の異名・陰暦月齢表 ◎ 旧国名・都道府県名対照図 ◎ 平安京条坊図・大内裏・内裏 ◎ 古文参考地図 ◎ 漢文参考地図	288 290 292 295 299 300 301 302



この教科書で学ぶために

教科書の構成

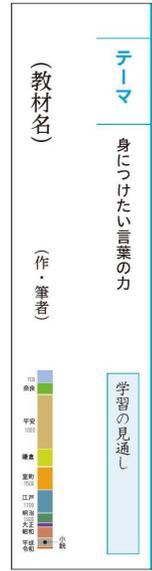
この教科書は「入門」単元、読む力をつけるための「1〜6」単元、書く力をつけるための「春・夏・秋・冬」単元、「選択総合」単元及び、さまざまな場面で活用できる「資料編」で構成している。

教科書の色分け

現代文は青系、古文は赤系、漢文は緑系、コラムは黄茶系、「入門」単元及び「選択総合」単元は紫系を基本色とした。この色分けによる教材の1覧は、p8〜9に掲載した。

各教材のしくみ

はじめに、単元で考えたいテーマ・身につけたい言葉の力、学習の見通しを示した。また、作品の成立時期を示す成立年代バーを置いた。



各教材の注の欄（下段または脇）

- 語注 ①②……主に固有名詞、難解な語句に解説をつけた。
- 発問 (▼印) 教材理解の手がかりとなる箇所に▼印をつけ、問いを示した。
- 漢字 覚えておきたい漢字を取り上げ、見開きページごとに、次の記号をつけて関連する漢字とともに示した。
- 対意 意味の違いに気をつける語(例 特徴 意 特長)
- 対形 対義的な語(例 悲劇 喜劇)
- 対字 字形に注意する語(例 感慨 形 概算)
- 対読 読み方に注意する語(例 繁 読 繁 読 繁 読)

単元扉では、目標に向けて3つの教材を有機的に絡めて学んでいく流れを明示しています。

2 物語は無限に展開する

構成や展開について考える

物語や小説を読んで、その展開に驚いたり、夢中になったりしたことがあるだろうか。作品の構成や展開に着目して、読み深めよう。

物語を構成する要素を捉える

沙石集 児の飴食ひたること 無住

物語の全体構成を捉える

説苑 景公之馬 劉向

物語の展開を把握する

羅生門 芥川龍之介

作家とよむ「今昔物語集」 福永武彦

コラム

「飴」から「砂糖」へ
蛍の光は誰を照らす
羅城門には鬼が棲む

語句（*印）見開きページごとにとまどめて示した。

現代文 慣用的な表現や熟語を中心に取り上げた。

古文 基礎的・基本的な古語を取り上げた。

漢文 訓読の際に注意する漢字、語句や句法を取り上げた。

◎ 羅針盤（学習の手引き）

課題1 教材の内容を的確に理解するための課題を示している。

協働的な学びのために 対話的に学びを深めるための活動を示している。

探究的な学び さらに学びを深めていくための例をあげている。

言葉を広げる 語句や言葉のさらなる拡充を目指している。

学習の振り返り 自分にとっての学習の意味を振り返る観点を示している。

コラム・広がる読書 教材に関連した知識や情報、読書の幅を広げていくためのさまざまな文章などを掲載した。

ブックガイド 単元末で、教材やコラム等に関連した本などを紹介している。

常用漢字 漢字は原則として「常用漢字表」に従った。これによらない場合は、振り仮名をつけた。なお、高校配当の音訓にも振り仮名をつけた。

リンクマーク 教科書内で参照できる「資料編」のページを示している。

課2 二次元コード 自ら学びを深めたり、予習や復習をしたりするときのために、さまざまな資料を用意している。これらは、二次元コードから参照できる。

構成や展開

物語を構成する要素を捉える

沙石集

無住

児の飴食ひたること

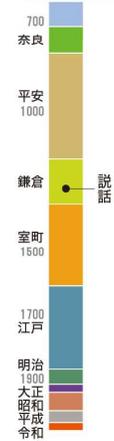
ある山寺の坊主、^①慳貪なりけるが、飴を治してただ一人食ひけり。よくしたためて、^②柵に置き置きしけるを、一人ありける小児①こちこに食はせずして、「これは人の食ひつれば死ぬる物ぞ。」と言ひけり。^③「これは人が食べてしまふと死ぬる物ぞ。」

欲深くけちであつた者が、飴を作つて一人(寺に)いた児に

るを、この児、^④あはれ、食はばや、食はばやと思ひけるに、坊主が

ああ、食へたいものだ、食へたいものだ

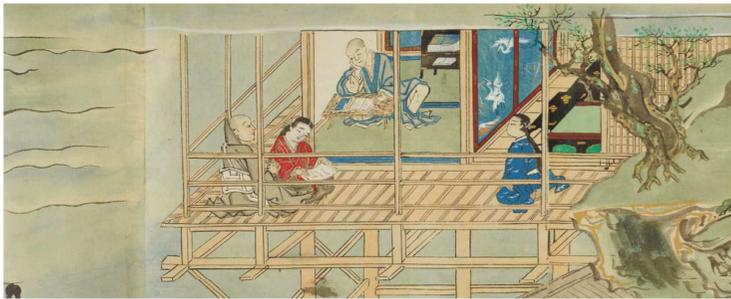
教材冒頭に、この教材を通じて取り組む学習内容を明示しています。



人物設定を整理し、話し合うことを通して、物語を構成する要素を捉えよう。

前半の古文教材では現代語訳を付記し、古文への慣れと内容理解を助けます。

他行の際に、柵より取り下ろしけるほどに、うちこぼして、小袖にも髪にもつけたりけり。日ごろ欲しと思ひければ、二、三杯よくよく食ひて、坊主が秘蔵の水瓶を、雨垂りの石に打ち当てて、打ち割りておきつ。坊主帰りたりければ、この児、さめほろと泣く。「何事に泣くぞ。」と問へば、「大事の御水瓶を、あやま



『融通念仏縁起絵巻』(江戸時代の模本)

① 柵「柵より取り下ろしける」は、誰の動作か。
② 小袖 袖丈の短い着物。

③ 水瓶 仏具。飲用や手洗い用に水を入れるもの。
④ 雨垂りの石 土に穴があかないように、軒先の雨だれの落ちる所に置いた石。

＊語句
あはれ

各教材後の手引き「羅針盤」では、内容理解の問いから協働学習の課題、振り返りまで、一通りの学習活動を提示しています。

羅針盤

課題1 坊主が「これは人の食ひつれば死ぬる物ぞ。」

(58・3)と述べたのはなぜか、考えよう。

課題2 児が、「あはれ、食はばや、食はばや」(58・4)

と思っていたのはなぜか、考えよう。

協働的な学びのために

「坊主」と「児」は、それぞれどのような人物として描かれているか。人物設定を整理して考え、交流しよう。

資料編 266 ページ

探究的な学び

物語のおもしろさを引き出す構成要素には、どのようなものがあるか、考えてみよう。

ちに打ち割^きりて候^{まを}ふ時に、いかなる御勤^{ごかんたう}当かあらんずらんと、
て割^きつてしま^まいました時に、どんなおとがめを受けることになろうかと、
口惜^{*}しくおぼえて、命生きてもよしなしと思^{*}ひて、人の食へば死
ぬと仰^{おほ}せられ候^{まを}ふ物を、一杯食へども死なず、二、三杯まで食^食へ
べれども、いまだ死に候^{まを}はず。」とぞ言^いひける。
まだ死にませ^なせん。
あけくのはてには
果ては小袖につけ、髪につけては
俵は食はれて、水瓶は割られぬ。慳貪の坊主、得るところなし。
割られてしまった。
児の知恵ゆしくこそ。学問の器量も、むげにはあらじかし。
尋常ではない。
才能もきつと並大抵ではないことだらうよ。

(第八卷第十一話)

▼問「得るところなし」とはどのような意味か。

*語句
口惜し／おぼゆ／よしなし／ゆゆし

語彙を広げる

●「ゆゆし」

もともと「神聖で忌みはばかられる、不吉だ」という意味であったが、そこから「忌みはばかられるほど普通ではない」という意味に広がった。さらに、「よいにつけ悪いにつけ、程度が普通でない」という意味を経て、「普通でないほどすばらしい、立派だ」という意味が生じた。

●「したたむ」(認む)

現代では「手紙を認める(書く)」のような限られた言い方のみが残っている。

学習の振り返り

- 物語を構成する要素を捉えることができたか。
- 物語の人物設定を整理し、話し合うことができたか。
- 新たに気づいたことや考えたこと、これから深めていきたいことなどを書き出そう。

教材ごとに「振り返り」を配置しており、教材配列を組み替えたカリキュラムにも対応できます。

教材と教材の間にある**コラム**では、直近の教材に関連する周辺・背景情報を紹介しています。

コラム

「飴」から「砂糖」へ

説話に出てくる話は、その後の作品の中に、さまざまなかたちで取り入れられていく。

沙石集の「児の飴食ひたること」は、飴が砂糖になり、坊主と児が主人と太郎冠者・次郎冠者に代わって、室町時代に完成した狂言の「附子」という演目に取り入れられている。附子というのは、トリカブトの毒である。

この狂言では、主人から「附子という毒から流れてくる風にあたってただけでも死んでしまう。」と諭された太郎冠者、次郎冠者が、扇で仰いで風をよけながら、附子の入っている壺に近づくと、この動作が入ってくる。帰宅後の主人への言い訳も、「二人で相撲をとっていたら秘蔵の掛け軸や茶碗を割ってしまったので。」と、より細かくなっている。

『今昔物語集』には「阿蘇の史、盗人にあひて謀りがあること」という話があるが、これが江戸時代にできた落語の「蔵前籠籠」に採り入れられた。深夜の路上で



狂言「附子」の一場面



◀「附子」の台本

強盗が衣類を盗んでいくというので、知恵をはたかせた男は、あらかじめ着ていた服を全て脱いで隠しておき、実際に強盗にあうと、「既に服はとられてしまった」と言って欺むくという笑い話である。襲われた時に乗っていたのが、平安時代末期に成立した『今昔物語集』では、牛車で、落語では籠というのが時代を反映している。

古文を読むために 2 用言・活用・係り結び

資料編 276ページ

■古文の主語を示す助詞

次のように、古文の文章では主語を示す「が」「は」などの助詞は通常は使われない。

坊主帰りたりければ、この児、さめほろと泣く。(坊主が帰ってきたところ、この児はさめざめと泣いている。)

ただし、従属節の中では主語を示すのに「の」が使われるのが普通である。

【作者・作品情報】

●無住 一二二六～一二三二 鎌倉時代中期の僧。他に説話集として『雑談集』などを編纂した。

■沙石集 仏教説話集。一二八三年の成立。仏教の教義をわかりやすくしたとえた説話を集める。笑話、昔話など、庶民に親しまれた話も収められている。本文は、『日本古典文学大系』による。

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

(古今和歌集・素性法師)

上の句は「辺りを見渡すと柳や桜を交ぜ並べて」という意味である。では下の句は、単に「都は春の錦だった」ということだろうか。これではあまりにも平板な歌だ。

平安時代の和歌で「錦」といえば、秋の山の奥深く、紅や黄に鮮やかに染まった紅葉のことである。作者は、では「春の錦」はなんだろうかと思つた。そう思つて眺めてみると、なんとそれは、柳の新緑と満開の桜をちりばめた町中の景色だったというのである。「なりけり」が気づきや発見を表すというのも効いている。

つまり、「都は春の錦だった」ではなく、「春の錦とは都のことだった」、「都こそが春の錦だった」と言いたいのである。係助詞は強調を表すといわれるが、このように、「他ではない、まさにこれこそが」という、他を排除して取り出すはたらきがついてくる。

「古文を読むために」は全5か所配置されており、「資料編」のより詳しい情報へのリンクも示しています。

前半の漢文教材では書き下し文と現代語訳を付記し、漢文への慣れと内容理解を助けます。

構成や展開

物語の全体構成を捉える

説苑

劉向

景公之馬

景公有馬。

其圉人殺之。

公怒，援戈，將自擊之。

晏子曰、

「此不知其罪而死。」

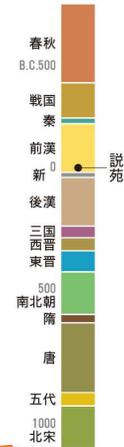
臣請為君數之、

令知其罪而殺之。」

公曰、「諾。」

- ① 景公 春秋・戦国時代の斉(現在の山東省にあった国)の君主。
- ② 圉人 馬を飼育する役人。
- ③ 戈 槍に似た武器。柄の先端に両刃の短剣をつけたもの。
- ④ 晏子 「?」前五〇〇」景公の名宰相。

人物の言動を整理し、紹介し合うことを通して、物語の全体構成を捉えよう。



景公馬有り。

其の圉人之を殺す。

公怒り、戈を援りて、將に自ら之を撃たんとす。

景公は馬を持っていた。

その飼育係が、(誤って)この馬を殺してしまった。

景公は怒り、戈を手にとりて、自らこれを殺そうとした。

晏子曰はく、

「此れ其の罪を知らずして死す。」

臣請ふ、君の為に之を数め、

其の罪を知らしめて之を殺さん。」と。

公曰はく、「諾。」と。

晏子はこう言った。

「この者はその罪を知らずに死ぬことになりました。」

私に、君に代わってこの者の罪を数えさせて責め、

その罪をわからせてから殺させていただきたい。」と。

景公はこう言った。「よろし。」と。

▼問「此」は何を指すか。
*語句
請(請ふ)／令(令めて)

作品の成立時代が一目瞭然の「成立年代バー」で、時代背景を踏まえた読解を行えます。

教材に関連する**探究的な学びの課題**も提示しています。

羅針盤

課題1 晏子が、圉人(い)にその罪をわからせてから殺させてほしいと願ひ出たのはなぜか、考えよう。

課題2 晏子が述べた罪とは、どのようなものかをまとめよう。

課題3 景公が圉人を許すことにしたのはなぜか、まとめよう。

協働的な学びのために

作品全体を簡潔にまとめ、グループで紹介し合おう。

探究的な学び

中国における「仁」の思想について調べてみよう。

「仁」の思想入門



語彙を広げる

●「することなかれ」

「なかれ」は禁止の意、……するな。次に続く動詞を強く否定する。「勿」の他「無」、「莫」も同じ用法で使われる。「……することなかれ」とも訓する。

●「令」と「使」

いずれも使役形。次に使役の対象を置き、動詞(目的語、補語)があとに続く。「使」が基本の語。

●「釈す」

「ゆるす」の基本の語は「許」。「釈」は、解き放つ(ゆるす)の意。縄をかけたり、部屋に閉じ込めたりする拘束を解いて自由にすること。

他にも「ゆるす」と読む漢字には「赦」、「宥」、「聴」などがあり、それぞれ用法が異なる。「赦」は、罪の公的な免除や税の軽減をさす。「宥」は、罪を大目に見る、人をなだめるの意。「聴」は、勧告や命令に従う、受け入れるの意である。

学習の振り返り

- 物語の全体構成を捉えることができたか。
- 物語に出てくる人物の言動について、整理し紹介し合うことができたか。
- 新たに気づいたことや考えたこと、これから深めてみたいことなどを書き出そう。

【作者・作品情報】

●劉向(りゅうきやう) 39ページ参照。

■説苑 劉向の編。春秋時代から前漢中期までの先人の逸話から、君主の心得となるものを集めた書物。



晏子(『古聖賢像伝略』)

漢文の語順
漢文と英語は、文の中の語順が基本的に、「主語―述語(動詞)―対象語(目的語)」となる点で似ている。
漢文 我讀書。
英語 I read a book.
漢文を日本語の語順に合わせて読むためには、「我」↓「書」↓「読」の順に読む必要がある。この順序を記したのが、返り点である。
また、英語では前置詞も使うが、日本語のような「てにをは」をおおよそ使わない点も共通している。
つまり、漢文の訓読とは、日本語の語順に合わせて漢字をたどりながら、もともと存在しない「てにをは」を補いながら読むことである。

学習の振り返りは、**観点別評価**にもつながります。

現代の日本文化につながる漢文の背景情報を紹介します。

コラム

蛍の光は誰を照らす

努力しているにもかかわらず、なかなか芽が出なかった選手が一気に活躍したとき、「彼は大器晩成だね。」などと言われることがある。「大器は晩成す」とは、大きな器物は完成するのに時間がかかるということ由来し、「大人物は遅く大成する」という意味で使われている。

また、失敗するのが怖くて新しい挑戦ができないときなどに、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」だよ。」と励まされることがある。この言葉は、もとは中国の後漢(二五〜二二〇)の班超が、部下の奮起を促すために言ったと伝えられる言葉で、「危険を冒さなければ望んでいるものは得られない」という意味で用いられている。卒業式でよく歌われる「蛍の光」であるが、その一節である「蛍の光、窓の雪」は、貧しかった東晋(三一七〜四二〇)の車胤が蛍を集めた光で勉強に励み、孫康が雪明かりで書物を読んだことに由来する。「苦学して成



71 | コラム 蛍の光は誰を照らす

「漢文を読むために」は全2か所配置されており、「資料編」のより詳しい情報へのリンクも示しています。

訓読の基本

漢文を読むために 1

資料編 288・290 ページ

訓読とは、中国古来の文章を、日本語として読むことである。もとの文章の形を残しながら日本語で読むために、さまざまな工夫が行われている。

白文・訓読文・書き下し文 漢文の表記には、次の三つの種類がある。

白文	漢字だけで書かれた原文	春眠不覚曉
訓読文	白文に訓点が付けた原文	春眠不 ^ず 覚 ^レ 曉 ^ヲ 。
書き下し文	訓読文を漢字仮名交じりで日本語の文章として書き改めた文	春眠曉を覚えず。

訓点 白文を日本語として読むために考え出された記号。次の三つをまとめた呼び方である。

- 1 返り点 漢字の左下に付される記号。読む順序を示す。
- 2 送り仮名 漢字の右下に付されるカタカナ。
- 3 句読点

返り点の種類

- 1 **レ**点 下の字から、すぐ上の字に返る。
得^レ狐^ヲ。(34・1) 狐を得たり。
- 2 **一・二**点 二字以上離れた上の字に返る。
宋^ニ有^二狙^公者^一。(37・1) 宋に狙公なる者有り。
- 3 **上・下**点 一・二点を付けた句を挟んで下から上に返る。
有^下朋^上自^二遠^方来^一。(26・1) 朋の遠方より来たる有り。
- 4 **丨** 豎点。二字以上の熟語に返って読むときにつける。
吾^日三^省吾^身。(229・4) 吾日に吾が身を三省す。

置き字 訓読する際に、読まない字。

此^レ不^レ知^二其^罪而^死。(65・2)
此れ其の罪を知らずして死す。

再読文字 返り点に従って、一字を二回にわたって読む字。

將^レ限^二其^食。(37・6)
將に其の食を限らんとす。

功する」を意味する「螢雪の功」という故事を踏まえた言葉である。

このような、私たちの言語生活と切っても切れない言葉は、故事成語ばかりではない。

「所謂、国際貢献とは……」「彼が天才と呼ばれる所以は……」などと使われる「所謂」「所以」は、日本語に漢語をあてた表記である。ちよつと改まったように感じるのは、漢文を介しての表現だからであろう。

漢文は私たちの言語生活に深く根づいている。ふだんの会話や何かの拍子にふと口をついて出てくる慣用句、ことわざの中には、漢文由来の表現がたくさん潜んでいる。日頃、それと知らずに漢文の表現を使っていることもきつと多いはずだ。

単元内の古典作品と合わせて学ぶことで、定番の現代文作品にも新たな視点が生まれます。

構成や展開

物語の展開を把握する

人物の心情や考え方の変化を追うことを通して、物語の展開を把握しよう。

羅生門
らしょうもん

芥川龍之介
あくたがわりゅうのすけ



ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剝げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や採烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。

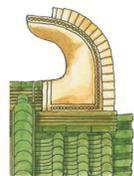


- ① 羅生門 平安京の正面にある「羅城門」。
- ② 丹 朱色の塗料。
- ③ きりぎりす コオロギ。
- ④ 朱雀大路 平安京の中央を南北に貫く大通り。
- ⑤ 市女笠 菅や竹皮で編んだ女性用の笠。

旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味が悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。



そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い鷗尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それが胡麻をまいたように、はつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついでに來



- ⑥ 採烏帽子 男性が常服の際に用いたかぶり物。
 - ⑦ 辻風 つむじ風。
 - ⑧ 旧記 古い記録。
 - ⑨ 鷗尾 宮殿・仏殿などの棟の両端に取りつけた魚の尾の形の飾り。
- ▲上図 平安京略図
- 砕・粉砕
顧みる 意省みる

3つの課題で、舞台設定の確認、登場人物の心情理解、物語のテーマの読み取り、と**段階的**に作品を読み解いていきます。

羅針盤

課題1 作品の舞台設定を確認しておく。

① 京都の町や羅生門の描写に着目して、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめよう。

② 「下人」が羅生門の下に至るまでの経緯を踏まえ、門の下での下人のおかれた状況についてまとめよう。

課題2 次の表現を通して、「下人」の心情を追ってこ

う。

① 「勇気が出ずにいたのである」(75・14)

② 「ある強い感情が、嗅覚を奪ってしまった」(78・7)

③ 「老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた」(79・5)

④ 「ある勇気が生まれてきた」(83・9)

課題3 「なるほどな、死人の……」(82・9)と話します

「老婆」は、自分が行ってきたことについてどのように考えているか。まとめてみよう。

協働的な学びのために

下人の考え方はどのように変化したか。また、そのような変化をもたらしたきっかけはなんだったのか。話し合おう。

その際、「物語を読むためのキーワード」の「転換点」も参考にしよう。

資料編 268 ページ

探究的な学び

この結末を経て、下人と老婆はどうなったと思うか。意見を出し合おう。

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、おれが引剥ぎ^㉑をしよう」と恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎ取った。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎ取った檜皮色の着物を脇に抱えて、またたくまに急なはしごを夜の底へ駆け下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それからまもなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光を頼りに、はしごの口まで、はって行った。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

▼**問**「嘲るような声で念を押した」のはなぜか。

㉑ 引剥ぎ 追いはぎ。

▼**問**「外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。」というのは、どのような状況か。

㉓ 黒洞々たる 底の知れない深い洞穴のような暗さ。

常用漢字一覧 ▼



効果的な**発問**が、着実な読解を助けます。

「語彙を広げる」では、本文中の**具体表現**を取り上げて学びます。

語彙を広げる

● 比喩

- 雨やみをする市女笠や採鳥帽子が、もう二、三人はありそうなものである。(72・5)
- この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのよう、勢いよく燃え上がりだしていたのである。(79・10)

● 擬人法

- 雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつという音を集めてくる。(75・4)
- そうしてこの意識は、今まで險しく燃えていた憎悪の心を、いつのまにか冷ましてしまった。(81・4)

学習の振り返り

- 物語の展開を的確に把握することができたか。
- 人物の心情や考え方の変化について話し合うことができたか。
- 新たに気づいたことや考えたこと、これから深めていきたいことなどを書き出そう。

★ 特定の登場人物の視点に立った表現

- 「羅生門」は三人称の語り手によって、「下人」に寄り添った視点で語られている。そのため、地の文には、推量表現が比較的多く用いられている。
- 上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこ、動かしているらしい。(77・2)
- もちろん、中には女も男もまじっているらしい。(77・15)
- 髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。(78・12)

【作者・作品情報】



芥川龍之介(一八九二～一九二七) 東京都の生まれ。小説家。作品に「地獄変」「芋粥」「藪の中」などがある。

◆ 出典 『芥川龍之介全集 第一巻』(一九七七)

コラム

羅城門には鬼が棲む

芥川龍之介は、『宇治拾遺物語』をもとに「地獄変」、『今昔物語集』をもとに「芋粥」「藪の中」というように、古典の説話を題材にして、近代人の自我と葛藤を描いた。「羅生門」も『今昔物語集』を題材としている(p.88参照)。現在は住宅地の中の公園に「羅城門遺趾」の碑が残るだけであるが、羅城門とはどんな場所であったのか。平安京条坊図(p.300)を見ると、街の中央の北に大内裏が位置し、その南端に応天門がある。そこから南に向かい、京の街の中心を貫いて朱雀大路が延びている。その最南端に羅城門があり、ここがいわば人間の世界の境界線である。平安京の外に一步踏み出したところには、異形の者たちの魔界が広がっていた。

昔から羅城門には鬼が棲むといわれ、その鬼が登場する話も多く記されている。あやしく屈折した人間の心理を描く背景として、羅城門は最適だったのである。



上 羅城門遺趾(京都市南区)



右 羅城門の鬼(鳥山石燕『今昔百鬼拾遺』)

〈国立国会図書館デジタルコレクションより〉

図版や写真を効果的に配置し、読解の幅を広げます。



広がる読書

作家とよむ「今昔物語集」

福永武彦
ふくながたけひこ

▼「羅城門」の訳文と原文

羅城門の楼上で死人を見る話

① 今は昔のこと、摂津の国の田舎から、盗みを働こうと思つて京にのぼつた男があつた。日がまだ暮れないので、羅城門の下に立って人目をしのびながら休んでいたが、北の朱雀門のほうに向かつて人がぞろぞろ歩いて行くので、人通りの絶えるまで、門の陰になるほうにまわつて様子を見ていた。すると、今度は南の山城の方向から、人がおおせい近づいて来る様子なので、どっちにしても見られてはぐあいが悪いと思ひ、門の二階の樓の手すりに、えいとばかり飛びついて、そろそろと這い上がった。すると、中で何やら灯を点しているのが、かすかに見える。

② そこでこの盗賊は、怪しいことだと思ひながら、格子窓か

いる着物とを剥ぎ取り、ついでに、すでに抜き取つてあつた死人の髪の毛も奪ひ取つて、羅城門の楼上から飛び下りると、あとも見ずに逃げ去つた。

⑥ 羅城門のこの楼上には、死人がいつもごろごろしていた。葬式の出せないような死人は、この楼上に捨てておかれた。これは、その盗賊が人に語つたのを、今に聞き伝えた話である。

(巻一九第一八話)

【参考】

羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の話

① 今は昔、摂津の国のほとりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげく行きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかかり登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。

② 盗人、「あやし。」と思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる煙の、白髪白きが、その死人の枕上にあつて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

ら中をのぞいてみると、床の上に、若い女が死んで横たわっている。その枕もとに灯を点して、年のほどももうわからないような、白髪頭の老婆が、乏しい灯先で一本ずつより分けながら、死人の髪を入念に抜き取つていた。

③ くだんの男は、思つても見なかつた光景を目にして、これももしや鬼でもあろうか、と怖気づいたが、もともと肝のすわつた男なので、ひよつとしたら幽霊かもしれぬ、おどかして正体をたしかめてやれ、と心をきめ、そつと戸を開くと、太刀を引き抜き、

「こいつめ。」と叫びながら、そばへ走り寄つた。

④ 老婆は不意をつかれ、あわてて逃げ出そうとしたが、狭いところゆえ、とても逃げられぬと知つて、今度は手を合わせて拝み始めた。

「このくそ婆あめ、何をしているのだ？」と男がきくと、老婆は恐る恐る、

「わたしの主人にあたりますお女中が亡くなられて、あとの始末をする人もありませんので、ここに宿をお借りしておりますですよ。丈にあまるほど長い御髪なので、抜き取つて鬘に売ろうとしているところ。どうか命ばかりは許してください。」と答えた。

⑤ そこでこの盗賊は、死人の着ている着物とこの老婆の着て

③ 盗人、これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にやあらむ。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。脅して試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「おのれは、おのれは。」と言ひて走り寄りければ、

④ 煙、手惑ひをして、手を摺りて感へば、盗人、「こは何ぞの煙の、かくはしるたるぞ。」と問ひければ、煙、「己があるじにておはしましつる人の失せたまへるを、あつかふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜きなり。助けたまへ。」と言ひければ、

⑤ 盗人、死人の着たる衣と煙の着たる衣と、抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

⑥ さてその上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の、葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたることや。

(『新編日本古典文学全集』による)



◆ 福永武彦(一九一八―一九七九) 福岡県の生まれ。小説家、詩人、フランス文学者。作品に「風土」「風のかたみ」などがある。

◆ 出典 「今昔物語」(一九九一)

単元末には、単元を通した振り返り項目と、関連図書紹介が設けられています。

単元の学習を
振り返ろう

□ 作品の構成や展開について考えたこと、気づいたことを書き出そう。

□ 自分自身で、これから深めてみたいと思ったことを書き出そう。

【単元の「ことば」】

- 説話
- 人物設定
- 舞台設定
- 構成
- 心情表現
- 比喩・擬人法



ブックガイド



『おもしろ古典教室』
うえのまこと
上野誠



古典授業が嫌いだった著者が贈る、新しい古典の楽しみ方。

『漢文のルール』

鈴木健一
すずきけんいち



漢文の理解をより深めるための、本格的な漢文案内書。

『羅生門・鼻・芋粥』
いもがゆ

あぐかわらのすけ
芥川龍之介



『今昔物語集』をもとにした作品を含む短編を収録。

『名作をいじる』

あべまこと
阿部公彦



名作に書き込みを入れたながら読む、新たな読書案内。

『文豪たちの友情』

いじいちこ
石井千湖



文豪たちの関係が垣間見られる、新たな小説の入門書。

『お伽草紙』

ときぞうし
ださいおさむ
太宰治



太宰中期の短編小説集。古典や民話をもとにした作品を収録。

「書く」教材は春夏秋冬で1単元ずつ配置されており、創作等の活動が設定されています。

- 春：フォトレポート
- 夏：短歌・俳句
- 秋：詩
- 冬：随筆

構成や描写を工夫する

春を切り抜く
フォトレポートに表す

【二十四節気】

立春 雨水 清明 穀雨

【春の言葉と風物詩】

春寒 春宵 春一番 春雨
花曇り 朧月 八十八夜
桜 すみれ 藤 木蓮

【春の伝統行事】

桃の節句 春の彼岸 お花見

資料編には、読解のための参照資料や言語文化史、古典文法の基礎情報などを掲載しています。

物語を読むためのキーワード

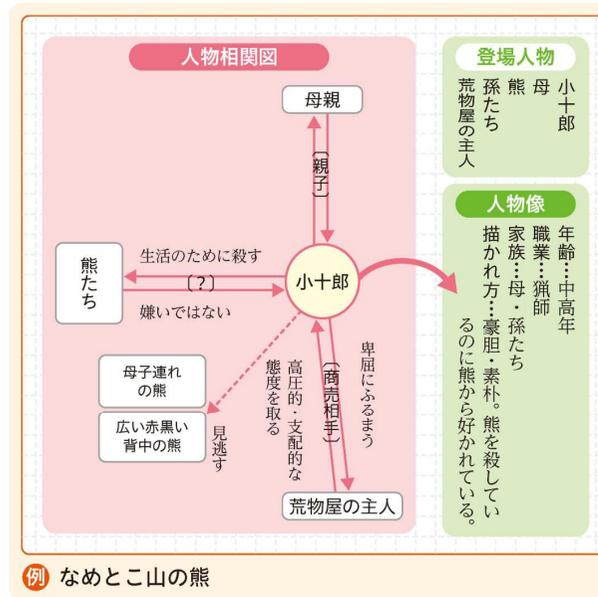
物語を読むためのキーワードについて、教科書に載っている作品を例に図解した。取り上げたキーワードは、次の七点である。

- 1 人物設定
- 2 舞台設定
- 3 心情表現
- 4 構成
- 5 転換点
- 6 語り手
- 7 時代・背景

こうしたキーワードを意識して作品を読むことで、物語の仕組みをもっと深く理解し、言語化することができる。例にあげた作品以外のものも、キーワードを参考に読み解いてみよう。

1 人物設定

物語には人物や動物などが登場する。それぞれの情報をまとめ、相互の関係を整理することで、物語を読み解くための準備ができる。



例 なめとこ山の熊

基本古語辞典

それぞれ主な意味を掲げた。
▼印：教科書の主なページ
▽印：参照する他の語

あ
あさまし (形シク) ①驚くばかりだ。②興奮だ。③情けない。④見苦しい。みすばらしい。⑤あさはかだ。
 *本来は、良しあしにかかわらず「①驚くばかりだ」という意味だが、悪いほうに偏っていった。
あし【悪し】(形シク) ①悪い。②不快だ。③卑しい。みすばらしい。④不都合だ。▽よし100
 *「あし」は絶対的に悪いことに対する嫌悪感を表す。相対的に悪いことは「わろし」。「あし」の対義語は「よし」、「わろし」の対義語は「よろし」。
あした【朝】(名) ①朝。②明るる朝。
あながちなり【強ちなり】(形動) ①無理やりだ。一方的だ。②ひたむきだ。いちずだ。

*熱心な様子を、①は否定的に、②は肯定的に捉えている。
あはれなり (形動) ①しみじみとして風情がある。②かわい。いとしい。③かわいそうだ。④悲しい。⑤情がこまやかだ。▼23・27・200
あまた【数多】(副) 数多く。たくさん。大勢。▼150
あやし (形シク) ■【奇し・怪し】①靈妙だ。神秘的だ。②奇異だ。異様だ。③不審だ。■【賤し】①卑しい。身分が低い。②みすばらしい。粗末だ。類 いやし。対 あてなり・やんごとなし。
 *本来は、人知を超えた不思議なものに対する畏れの気持ちを表した。そこから「普通ではない、不審だ」と意味が広がった。
ありがたし【有り難し】(形ク) ①めったにない。珍しい。②できそうもない。③(めったにないほど) 尊く優れている。類 めづらし・まれなり。▼25
ありく【歩く】(動四) ①出歩く。②行ったり来たりする。
いたし (形ク) ■【甚し】①程度が甚だしい。②優れている。すばらしい。■【痛し】①痛い。苦痛だ。②精神的につらい。▼97

いたづらなり【徒らなり】(形動) ①無駄である。無益である。類 あだなり・はかなし。②かいがない。むなし。③場所が空いている。④することがなく暇である。▼108
 いと【副】①非常に。とても。②全く。本当に。類 いとど。▼23・97・100・202
いふかひなし【言ふ甲斐なし】(連語) ①言ってみてもしかたがない。②言う値打ちがない。取るに足りない。③情けない。▼100・148・152
いみじ (形シク) ①普通でない。②優れている。すばらしい。③とてもうれしい。④大変だ。ひどい。▼25・97・203
 *「程度が甚だしい」という意味で、肯定的にも否定的にも使われる。
いやし【卑し】(形シク) ①身分が低い。類 あやし。対 あてなり・やんごとなし。
いらふ (動下二) ①答える。②返事をする。③返答する。
うつくし【美し】(形シク) ①いとしい。恋しい。②かわいらしい。③立派だ。見事だ。
 *「うつくし」は心情的な美しさである一方、「うるはし」は整っている美しさに対する感情をいう。「きよげなり」はさっぱりとした美しさ、「きよらなり」は気品が